

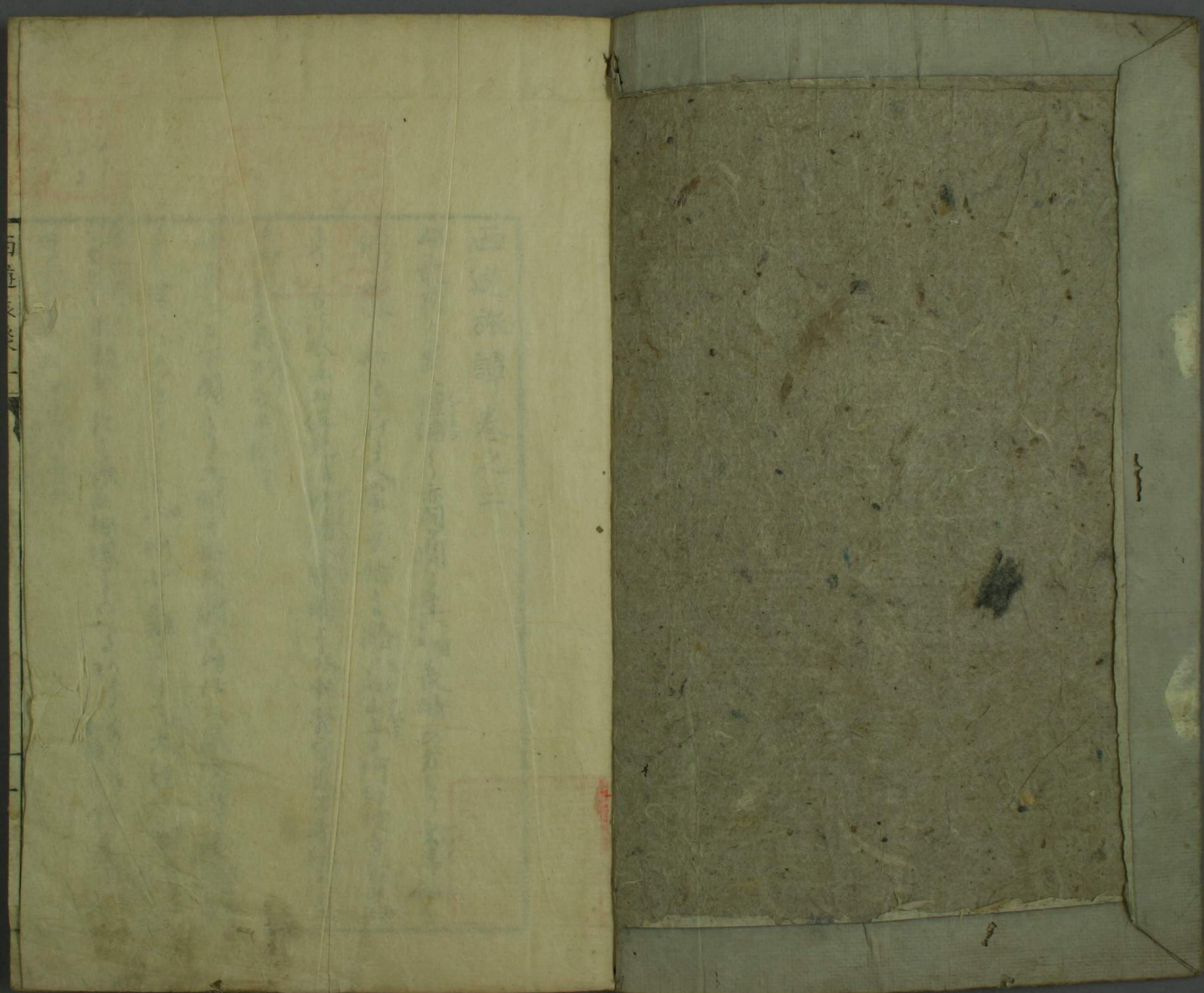
四遊旅譚

卷之三

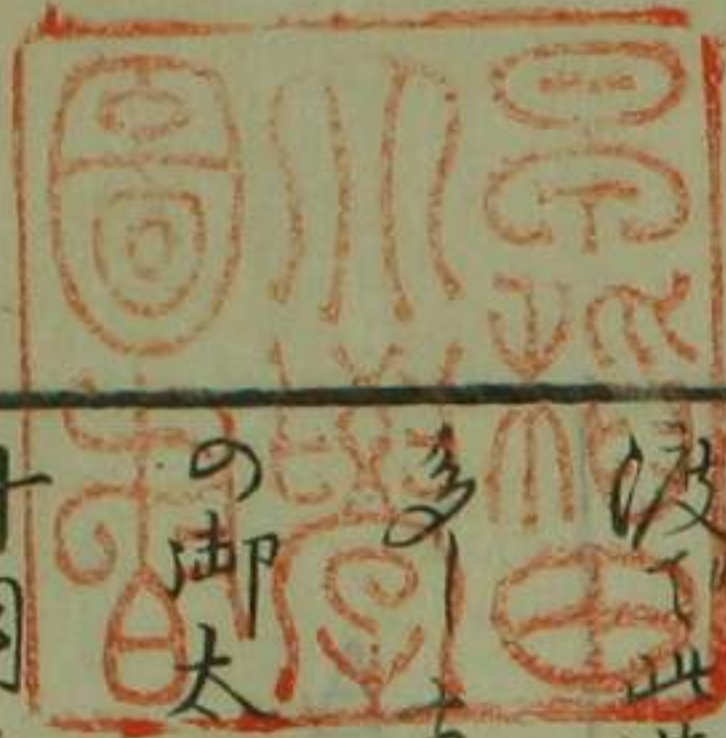
ル	3
334	
3	

特別
ル 3
334
3





門ル呂3
號 334
卷 3



西遊旅譚卷之三

扱長府をこぞ檀浦より赤間関に至^{下関}長崎の方より玄界灘を

渡^此港より船をうつりて家一里餘を瀬戸口山上^{トキササキ}阿弥陀寺寶物

多^シの法眼画士佐光信檀浦合戦圖を并に能登守太刀安徳天皇

の御太刀異形故ぬ図も

十月三日下関より九州の北に渡る時大風吹出波濤高

一皆人色をうしりて漸く難く大^{タイリ}裡に著^此此後大

半小倉、此海中に兵馬塚ありて所^{トキ}秀吉より引島^ミり

田首も云平家の門別退きし島あり



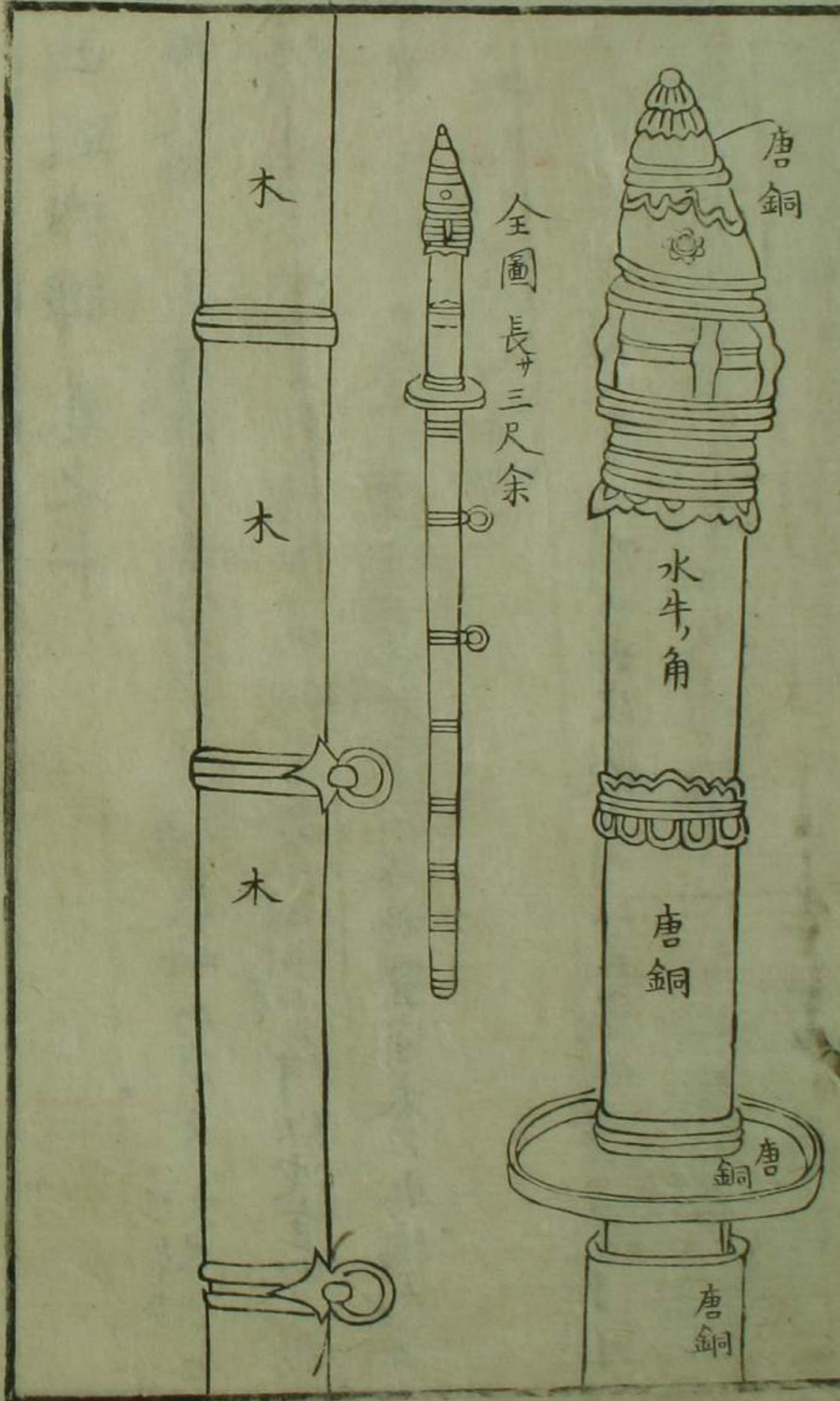


下関圖
阿弥寺ヨリ望



下関を
眺む

安德天皇御太刀之圖



全圖長サ三尺余

唐銅

水牛角

唐銅

唐銅

唐銅

木

木

木

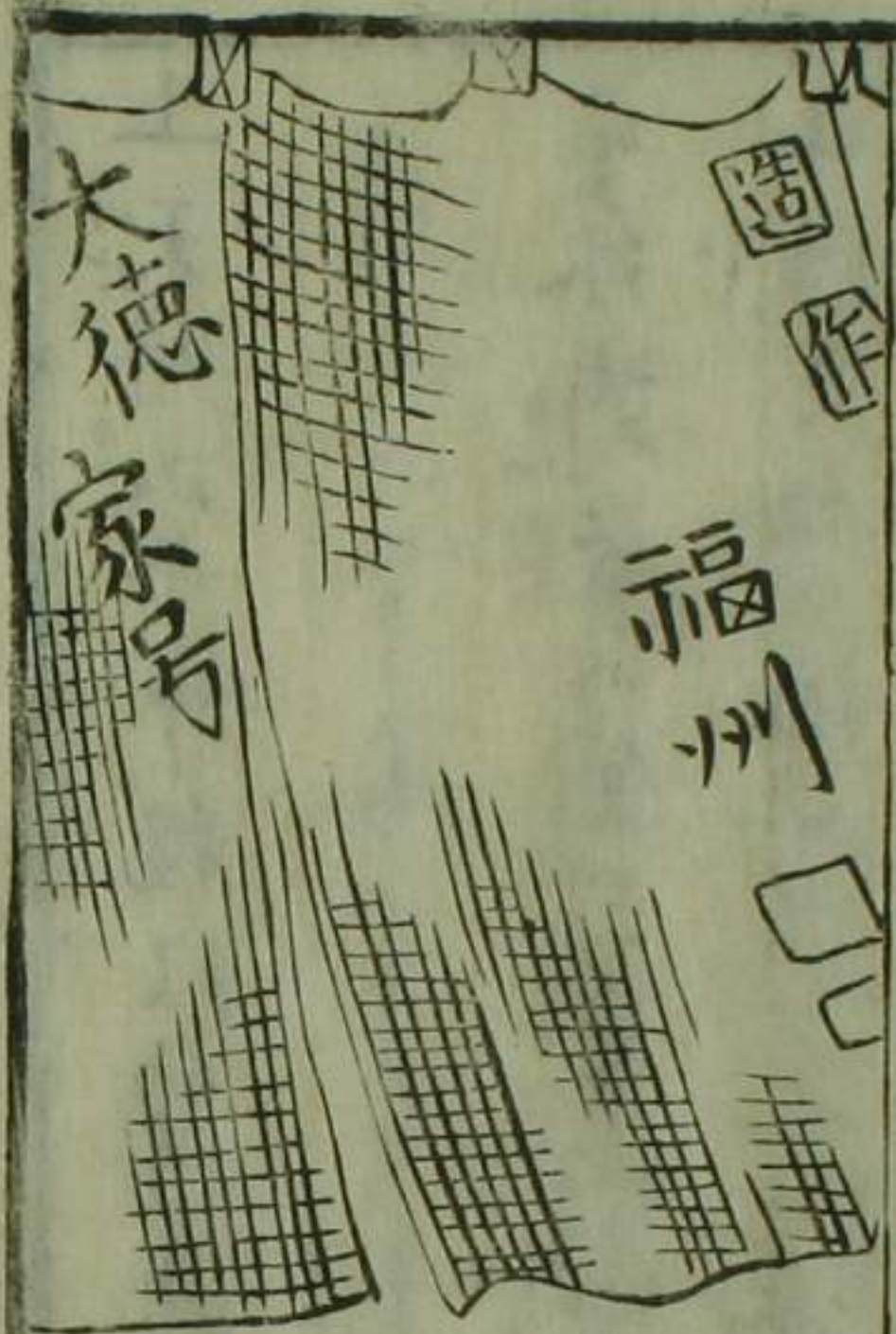
大裡人家二三町有小倉まで一里半ゆき海を左の方ふりて小倉
 の城をゆる別小笠原侯十萬石乃城下を市街縦横を夫より
 筑前れ地黒崎の驛に急此地より長崎の方を月よりまき
 時雨と風雨多し東方十月の小六月と東西風にまき
 小舎の小屋の湖飯塚の間五里あり田邊川に鶴より
 真鶴白鶴白鶴ハ全體白シ黒鶴小ニシテ黒ク筑前の地總々平野田
 畑に飯塚飯塚と内野れ右の方に入田畑をすまき
 山路をゆるり四里太宰府より此路甚乃山中かき大石
 道路を塞ぎ十間又五六間あるも此より天満宮大を

旅館門をゆるり他ゆるり橋三ツあり過現未ノ山門をゆるり本社左
 右廻廊にゆるり池さびゆるり地ゆるり他乃大楠多し毎年
 八月廿一日より廿六日まで祭禮近郷より参詣多し天原山
 安樂寺寺ニアラズ地名ナリ岩踏川社乃北の方三里に在思川
 宰府町西流る川也愛深川社北南あり哥に
 白川ハ宰府町西南にゆるり哥に
 観世音寺清水山博多ハカク博多ハカク活博多ハ戒壇院観世音寺

西邊方言
くく近一都府樓の跡也又安徳天皇乃殿の跡も先奉
此寺本堂より下より瓦二枚を堀出し生焼く赤色伊部
戸記の如く少人の物なり是都府乃古瓦より菅
丞相乃符の如く復見瓦色此寺より六七町をさす田乃
中に礎あり方五六尺央より丸柱の象より總て此色
缺瓦多し表に志高より裏布目より陸奥多賀城の瓦
の如く二日市針より丸瓦よりなる幸橋の如く
多しものもさすものもさすゆけ先奉れとす
四方寺山高橋招運う城跡と云天拜天神の祠ハ温泉町の

上天拜山乃中程にりり漆川哥也
名くはつとまもるる川をたつとくはめり
生外野萱の園より赤城乃宮の赤城を御幸府ハ四面
山繞り海ハ福岡の如くに隔り故り寒月雪原とす
夫より原田より田代ゆき皆筑後乃高良山より中
原より彦山より赤城は是より六里又久留米の城見
有馬疾中春より神崎の赤吉鶴多し此赤城ハ高麗
鳥と云又此をくく索新をくく作賀の城下
町二里餘人家はくく富高をくく婦人乃塔の風

江戸の似しう境原のまゝ一丈を一丈二丈を二夜
 と呼ぶに似しう異なり此を越して石乃あびしをた
 して中まらハ寒月雪を積り二三尺小田にある此等
 農人の家ごとに暖の産をるるに藤布なる此等の
 支那より荷物を包みたる是なり圖の如し



夫より成瀬の如く又塚崎の如く野茶より彼本
 此等大山坂の如く程々大村の如く十町をうら右家中路の
 半は程を植るを越れば大村城下人家は十月九の市
 街戸毎に海産を張香と焚燗てられし間此地飽瘡
 をきく此等其國は海産の如く除くが如く町れは
 此より舟を海産の如く小島多し景又佳長井の如く
 此等七里舟より程々以事十餘町時津に至る大村の領地
 三里鯖腐石道端に中野村平野村の如く此等此の
 路常の犬を又此等神の如く小童多し其筒袖を唐人の風
 にかはる

鯖^{サバ}腐^{クサ}石^{イシ}敷^シ文^{モン}二^ニほ^ホり^リ
上の石^{ウヘノイシ}危^{アザシ}く懸^ケ
工^ウ民^{ミン}の口^{クチ}サ^サバ^バの^ノつ^ツる^ル魚^{イサ}を
焼^{ヤク}て^テし^シて^テい^イふ^フ石^{イシ}を
焼^{ヤク}く^クる^ル事^{コト}を^ヲ畏^{オソ}
れ^レら^ラし^シる^ル事^{コト}を^ヲ畏^{オソ}
れ^レら^ラし^シる^ル事^{コト}を^ヲ畏^{オソ}



山^{ヤマ}皆^{ミナ}大^{ダイ}石^{イシ}ふ
佛^{ブツ}を^ヲま^マさ^サむ
と^ト崎^{サキ}入^イる^ル
才^{サイ}



又^{マタ}石^{イシ}階^{カハ}多^タ大^{ダイ}石^{イシ}に^ニ佛^{ブツ}を^ヲ刻^キり^リし^シて^テ村^{ムラ}を^ヲ去^サり^リ胡^コ羊^{ヤウ}豚^{トウ}
雞^{トリ}を^ヲ畜^{イク}し^シ長^{チガシ}崎^シ市^シ中^{チュウ}唐^{タウ}人^{ジン}和^ワ蘭^{ラン}に^ニ售^ウる^ル西^{サイ}坂^カを^ヲ長^{チガシ}崎^シを^ヲ見^ミる^ル
坂^カを^ヲ下^スり^リし^シて^テ入^イる^ルに^ニ數^{スウ}日^{ニチ}留^{トド}ま^マり^リ長^{チガシ}崎^シ市^シ中^{チュウ}海^{カイ}岸^{ガン}の^ノ家^カを^ヲ修^{シユ}す^ス
故^{コト}石^{イシ}階^{カハ}多^タ又^{マタ}橋^{ハシ}も^モ石^{イシ}を^ヲ作^{ツク}り^リ婦^メ人^{ジン}の^ノ生^{セウ}眉^{メイ}を^ヲ剃^ツり^リ脂^チに^ニ加^カま^マ
輪^{リン}を^ヲ使^シひ^ヒて^テ言^{コト}を^ヲ傳^{ツト}へ^ヘり^リ放^{ハク}言^{ゴン}を^ヲし^シて^テ左^サニ^ニを^ヲ載^{ノス}見^ミの^ノハ^ハボ^ボウ
姉^{アネ}或^{ナラバ}娘^メを^ヲゴ^ゴの^ノ人^{ジン}の^ノ妻^{ツメ}を^ヲヨ^ヨカ^カッ^ッサ^サン^ン色^{シキ}情^{ジョウ}を^ヲ相^{ケン}思^シ唐^{タウ}顔^{ガン}踏^{フミ}
壇^{ダン}石^{イシ}を^ヲキ^キン^ンバ^バ四^シを^ヲバ^バセ^セウ^ウ遊^{ユウ}里^リを^ヲ散^{サン}歩^ポを^ヲス^ス子^コ子^コ番^{バン}椒^{カウ}
を^ヲコ^コシ^シヤ^ヤウ^ウ物^{モノ}を^ヲ喫^クむ^ム事^{コト}を^ヲシ^シケン^{ケン}カ^カア^アジ^ジイ^イを^ヲ食^シふ^フ事^{コト}を^ヲコ^コレ^レシ^シ子^コ子^コの^ノ行^{ユク}
を^ヲヤ^ヤツ^ツト^ト親^{シン}父^フを^ヲオ^オチ^チヤ^ヤン^ンと^トし^シて^テ又^{マタ}言^{コト}の^ノ中^{チュウ}に^ニバ^バツ^ツテ^テし^シる^ル事^{コト}を^ヲ



山八田畑を
見し



西坂より長崎を望む
 旗を多くし紅毛出ま
 其と云に支那船二三艘
 紅毛船八月港を出て一里を
 隔り高崎に
 支那人館六十善寺と云低
 なる

西遊雜記三
 その船、多し、風土暖し、冬月雪始、園中に橙植
 昨、琉球芋多し、赤白、赤無、大根、短、ケラノ尾と云
 用、

支那人館ハ十善寺寺ニアラズウチ地名ナリ中に社稷ツチガミを祭又閣帝カウテイ堂テイメイ帝命テイメイを奉ウケ渡海トカイ者古ハ氏中ハンシナカハ王氏ワンシ今ハ錢氏センシの人ヒト其の所ナリ是と自分ジブン一己イツコの交易カウエキに渡海ワウカイ者蘇州ソウジウの人也則蘇州ハ日本ニッポン北太坂キタノサカの地ナリ今ハ七八艘シチハチフネの渡海ワウカイ者南京ナンキン第一ダイイチ乃繁榮ハンエイの所ナリ今ハ七八艘シチハチフネの渡海ワウカイ者二艘ニフネと其の程赤城セキセウの所ナリ浙江セツコウの所ナリ乍浦サホの所ナリ人々十五年ジュウゴネン以前イマゴより長崎ナガサキより又方西園サイエンの所者ハ画エを好スハ九年クニヤク以前イマゴより渡海ワウカイ者福建フキンの人ヒト其の所周王シウワン福宋フクソウ敬進ケイジンの所數年スウネン渡海ワウカイ者

少オウの所トコロも書畫ショガクを作ナサるも其の所名ナきくは伊字イジ九山水クニノミヅの画エ草亭サウテイ撲庵ボクアン宕山タウサン可亭カテイ皆書ミヤカキを好スハ伊字イジ九山水クニノミヅの画エの所皆此類シレウ高賈コウカハ交易カウエキの餘暇ヨカ此コノ技ギハ日本ニッポンの所高家コウカの所哥俳諧カハハハ書畫ショガクを好スハ其の所多オウ是又此コノ所能画ニッポン能書ニッポン或文雅ブンガの所賞シヤウするは其の所沈南蘋シナンピ一人能画ニッポンとして画師ガクシなり又近年ニヤクニ其の所方西園サイエンの交易カウエキに疎ウツクめ画エを好スハ其の所水墨スイボクの所著色シヤクシキの所其師也シ其の所周西山シウシヤン名選シケン此一人ハ北京ペキンの所産サンする遊歴ユウレキの所南ナン京キンの所頃長崎コウナガサキ來る此者一人ハ文雅ブンガの所能書畫ニッポン

ところへ百日をさるべし帰帆を官を避けるも此を南
 京寺或悟真寺し度々宿對して書畫を見る又
 此方よりも画など贈る總て支那人の日本人もつづ
 事より志をさるべし似たり雅もる俗もつづ又顔面
 日本人の如く只衣裳のみ多しひつるのみなり

支那人之圖

明之人の清の代に
 乾隆五十二年
 也風俗如圖
 頭ハカサヲ剃テ
 中ニ髮ヲ置



下人

乾隆帝 天下を巡狩
 する事 四度 歳九十餘
 あり





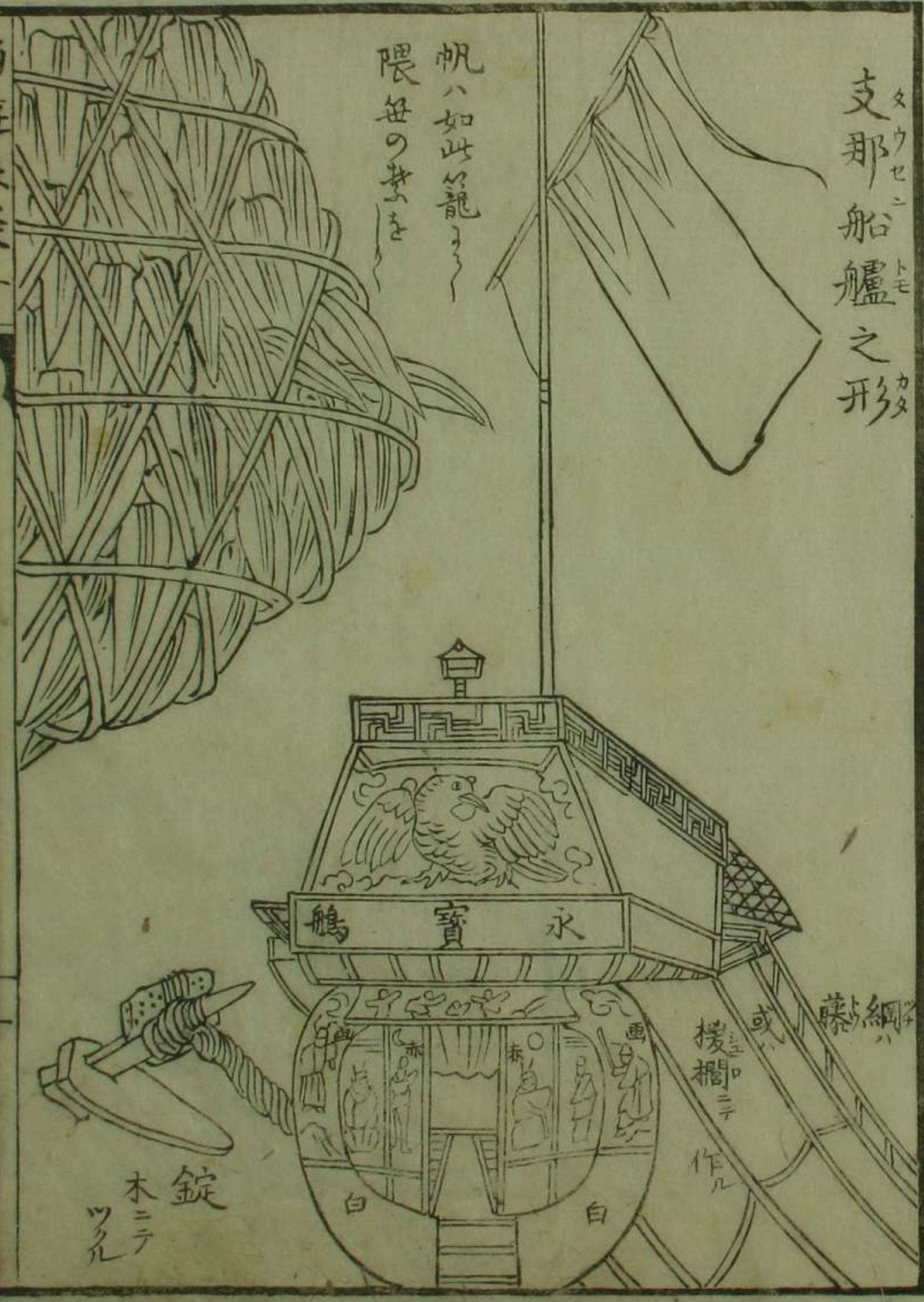
露臺之圖 夏月涼也

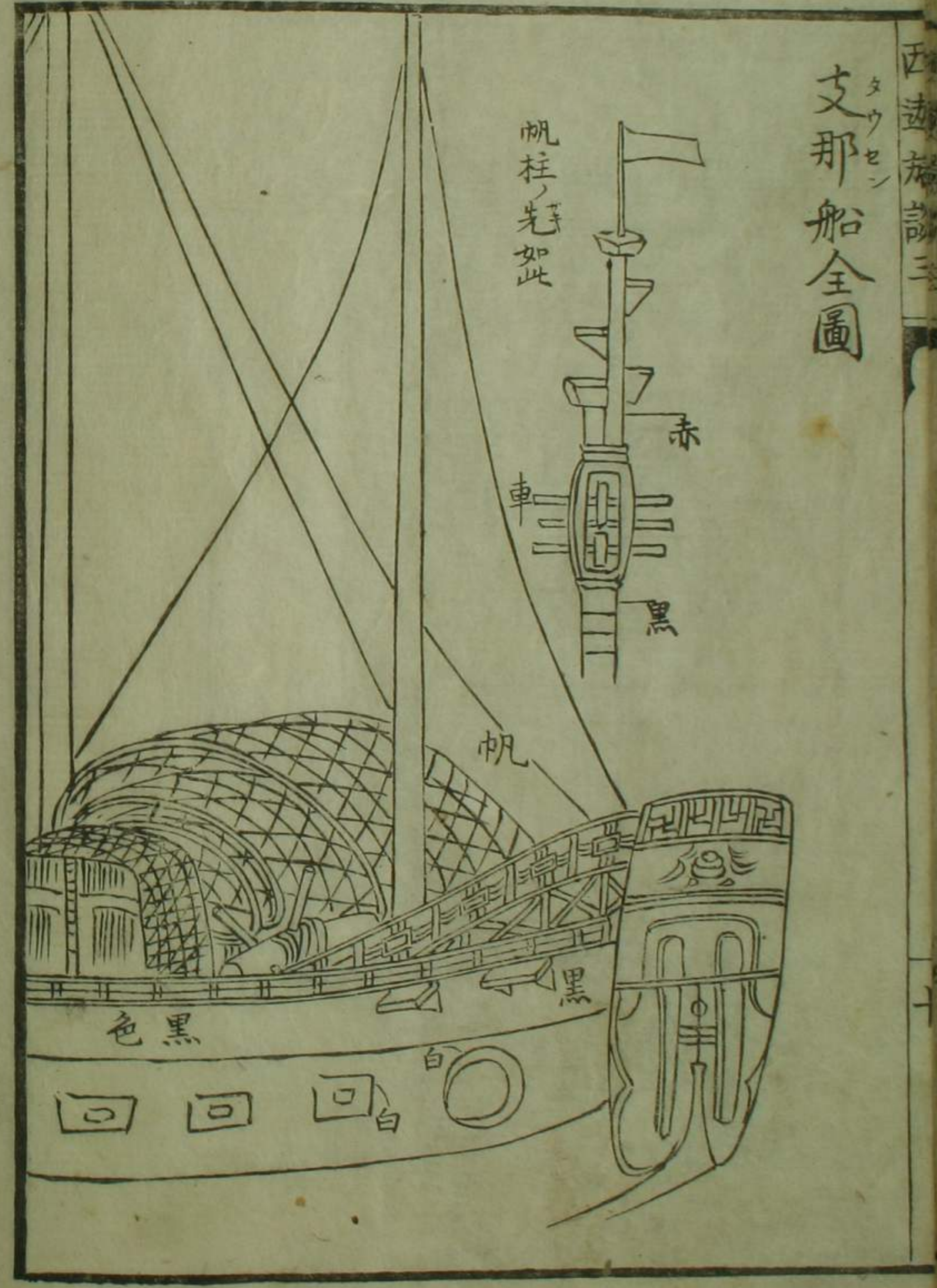
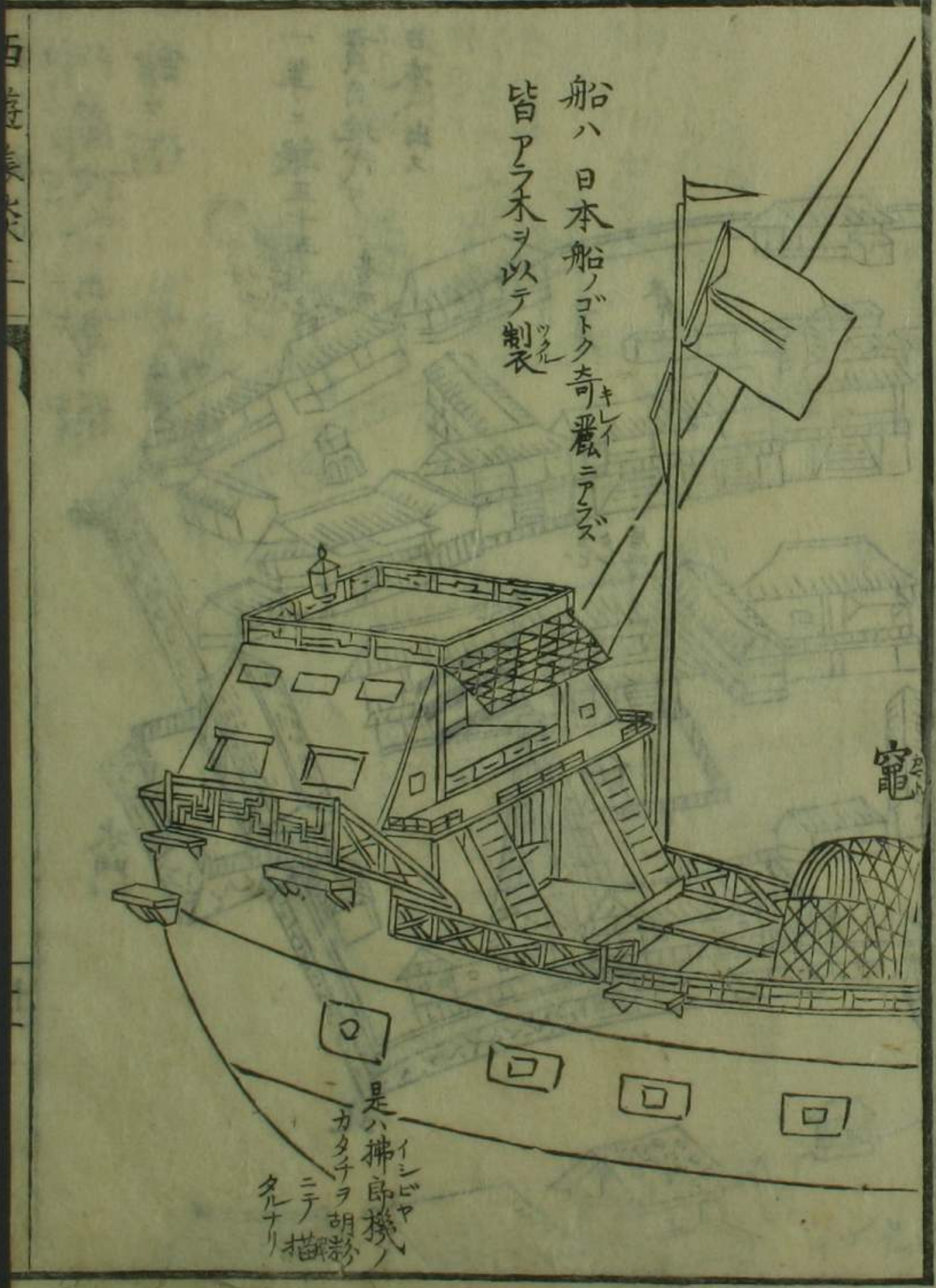
支那人居宅ハ日本々家を作りて客を招くは作りて日本のみ

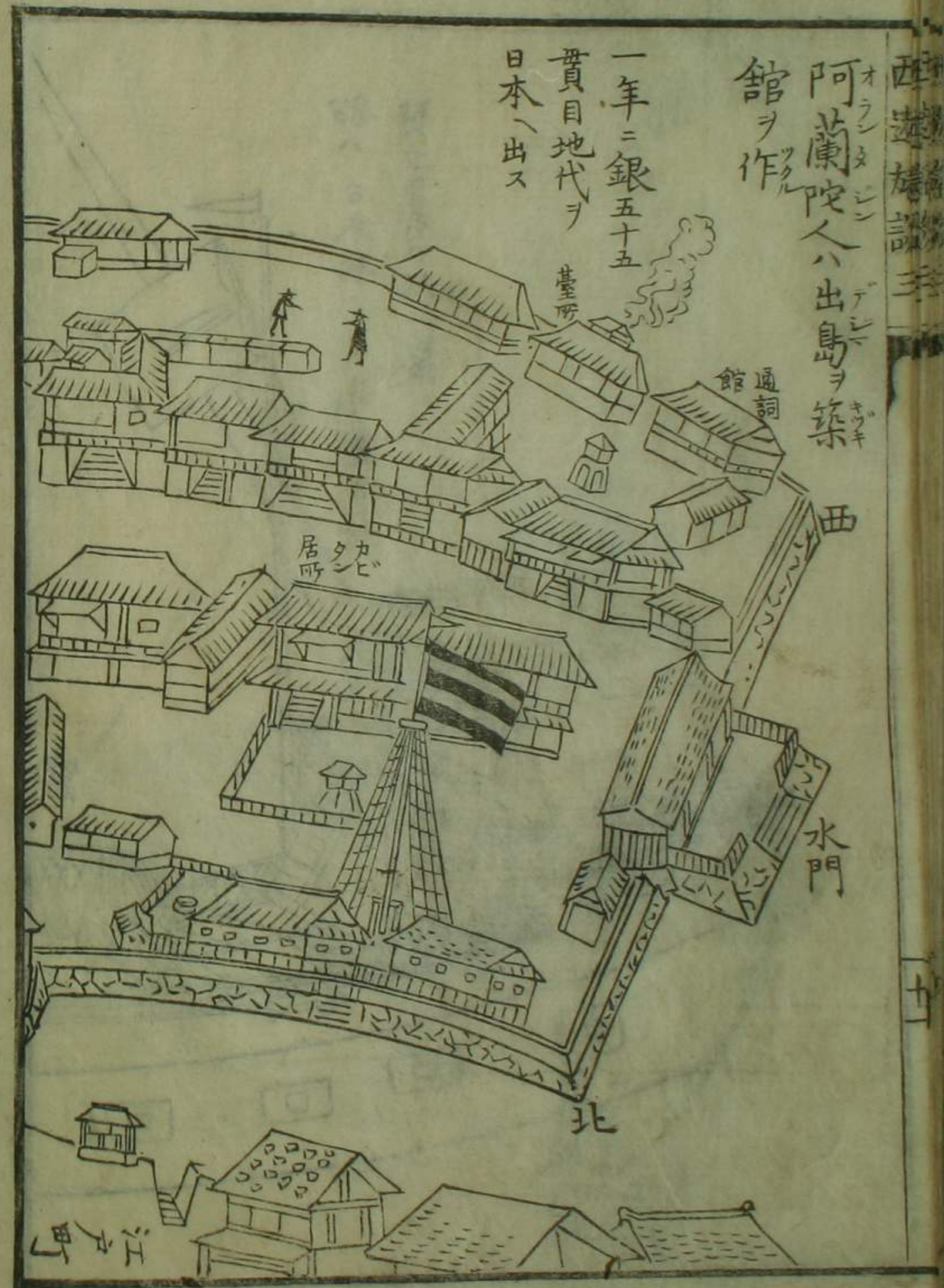
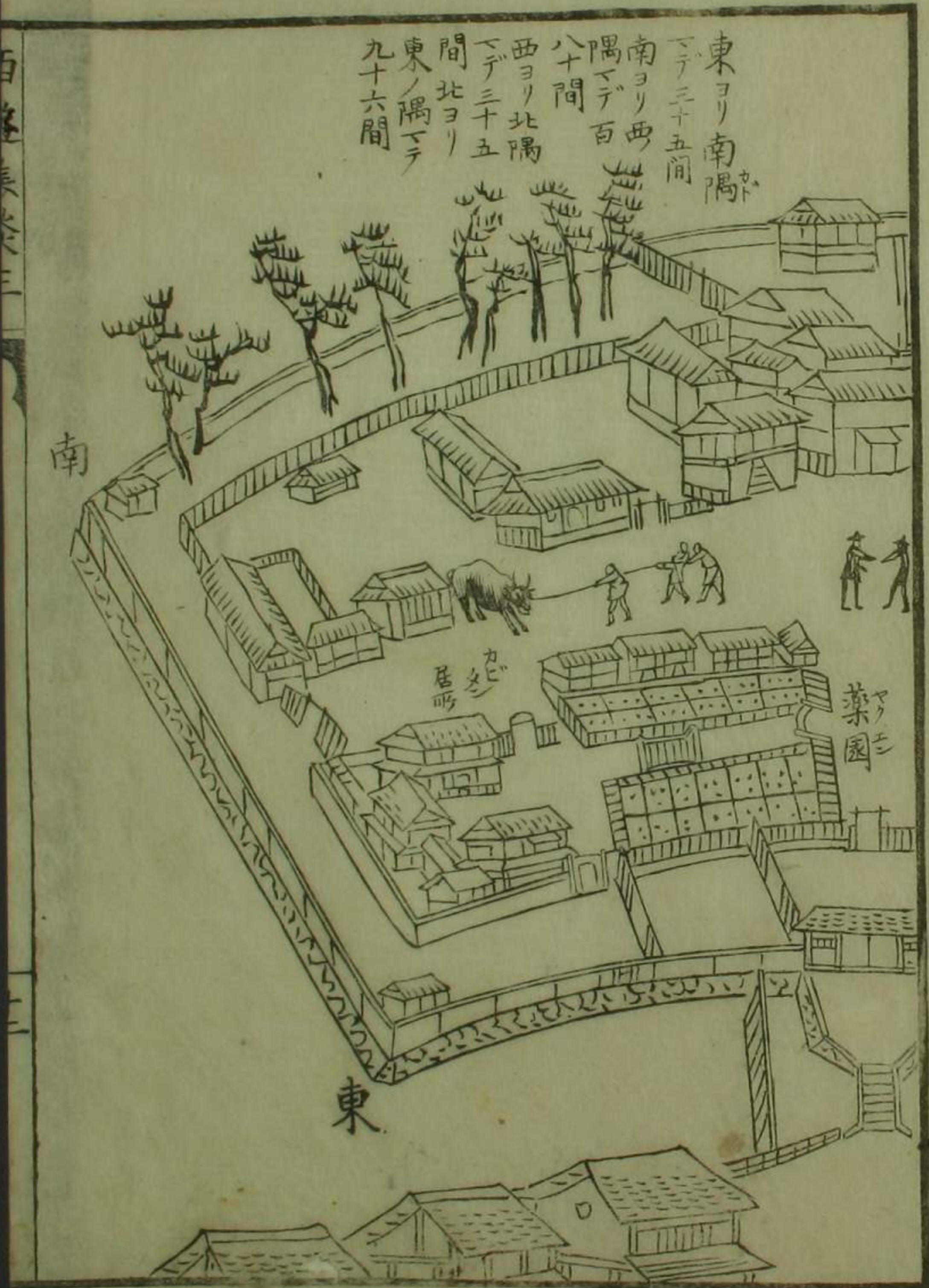
支那船ハ梅ヶ崎と云ふりり船の大きは十五六間帆ハ布にあぐら藤を以て籠をつくり内は隈篋の葉を布錠と木を以て製艦乃方人物或就鳥の形を粉緑を以て彩画事甚俗なりと云外は黒塗を以て四角ある形を白く画是ハ拂郎機ノ形を画にかきしるもの也

支那船艦之形

帆ハ如此の籠隈毎の葉を







支那カララランタ和蘭セシウカクイを外洋州の船を 日本ツシマに送るに
 伊勢國イセの六湊ムナシロより泉州センシウの泉州センシウ港ミナトに若又船前博
 多タあさくろも肥州平戸ヒヅウヘイコに渡海して寛永辛巳の年
 今これ長崎ナガサキにあるお出島デジマのうらカヒタンカヒタンハ日本はと
 波岡ハナノエをヨツフルホウドマモ 居所ニテ亦は在ナケ所ハ外ソトより
 水ミヅに樓上四五間方ハハなるお欄間レマ下硝子ヒイドロ額ガク數千品スジツヒンを掲カケ
 け画人物山水花鳥の類タガありて動ウガくなく又掛イリス子
 をとびしカザリをみるに師ウツおや
 阿蘭陀人 日本長崎より本國ニッポンより 日本里數リスウあり

一萬三千里ハツマンサンリと云ふに一千四百五里センカチユウゴリは
 ず此 日本より西に航し少くも二百五十里ニヒヤクゴジュウゴリありて一月
 おりて東と生セザルアライキナリ或牛肉アライキナリを以て食シヨク人故に印度
 亞法ヤフは二船と先がし交易カウニキを以て第一乃國勢コクムと云ふに○イス
 シヤ○フランス○イギリス○アルガ子○オウレン○モスコビヤリニスも此レに
 皆上ウロ只の流ナリを以て○ラシダラシダは○法州フツウの流ナリと交易カウニキあり
 るワシと潤ワシ半と移ワシムる國クニなり 余り數を以て地球チキウ 鼠シロネ谷ヤぬ
 波國ハノクニの海ウミはハスハストヨトヨゴゴノ海ウミシヤカタラレ人ヒトなり 道直下ミチナカの赤
 地チ國クニなり 阿蘭陀人アランドタヒトの下奴ゲヌと云ふは來るに色イロハ黒クロなり

河のほとりでもほたるの星の光にぬるゝもやー又思ふ
けもあり夏月の裸ハダカの装束乃きまのと纏ミヅあき
ベンガラベンガラ結ヒビり冬月の和蘭オランダの衣服をけりたるこれ紅
毛ウシの衣服のヒ羅紗ササ花布ハナヌメの頭巾カシマあり
せークロンボウクロンボウさうけとまの是ちや

タロスタロスの舟のりこれ船中乃水カミまのあ
船の中ナカのりこれ船中乃水カミまのあ
此本國の人コノクニノヒトの言語ゴゴと和蘭の辯マタあり顔色ハ
白く髪ハ茶色目ハ解ヒトシ赤ベニなる茶色のもの

散髪衣服阿蘭陀乃如サンパツイフツアランドノカド此タロス帆カミのりらにのりて
身ミのりらなる事コト多オホシし

和蘭船オランダノフネ大サ四十間表乃方オホサヨソノハタ形カタをけりて
しえ思オモへ艦フナボのカタ家形ヤカカタ作内入皆玻璃障子ビイドロシヤウシ前マり
天幕テンマクをさるサ地球チキウ天幕テンマクをさるサ半ナハに楫カガを廻マり車クルマを
さるサの左右サダマり水ミヅをさるサ帆カシマをさるサ所トコロに建タてり
下シり入拂イシビヤ船フネ後ノチ五左右イハのり朝暮アサヨ可カる
又十二三フタトもの事コトあり是コノ船フネにノり
波國風カノクニノカゼあり船フネのり者ウヂのり者ウヂのり者ウヂ
又洋中オウチウに出イて

南金葉卷之三

三

要害に及ばず火を消すべし
 此國は火を消すに
 霹靂の如く荷物を船の底に積置
 相とせし所は下に火の積置
 消火もおぼふは是を消すに
 臭と著しきを通せし支那の船
 船は精々其乃ららひとあり



ウイントル之圖

火硝守人



瑠璃燈

和蘭カビシ居所
 ビイロ額人物山水
 とまが障子ビイ
 占ほく張ナリ



和蘭カビシ居所

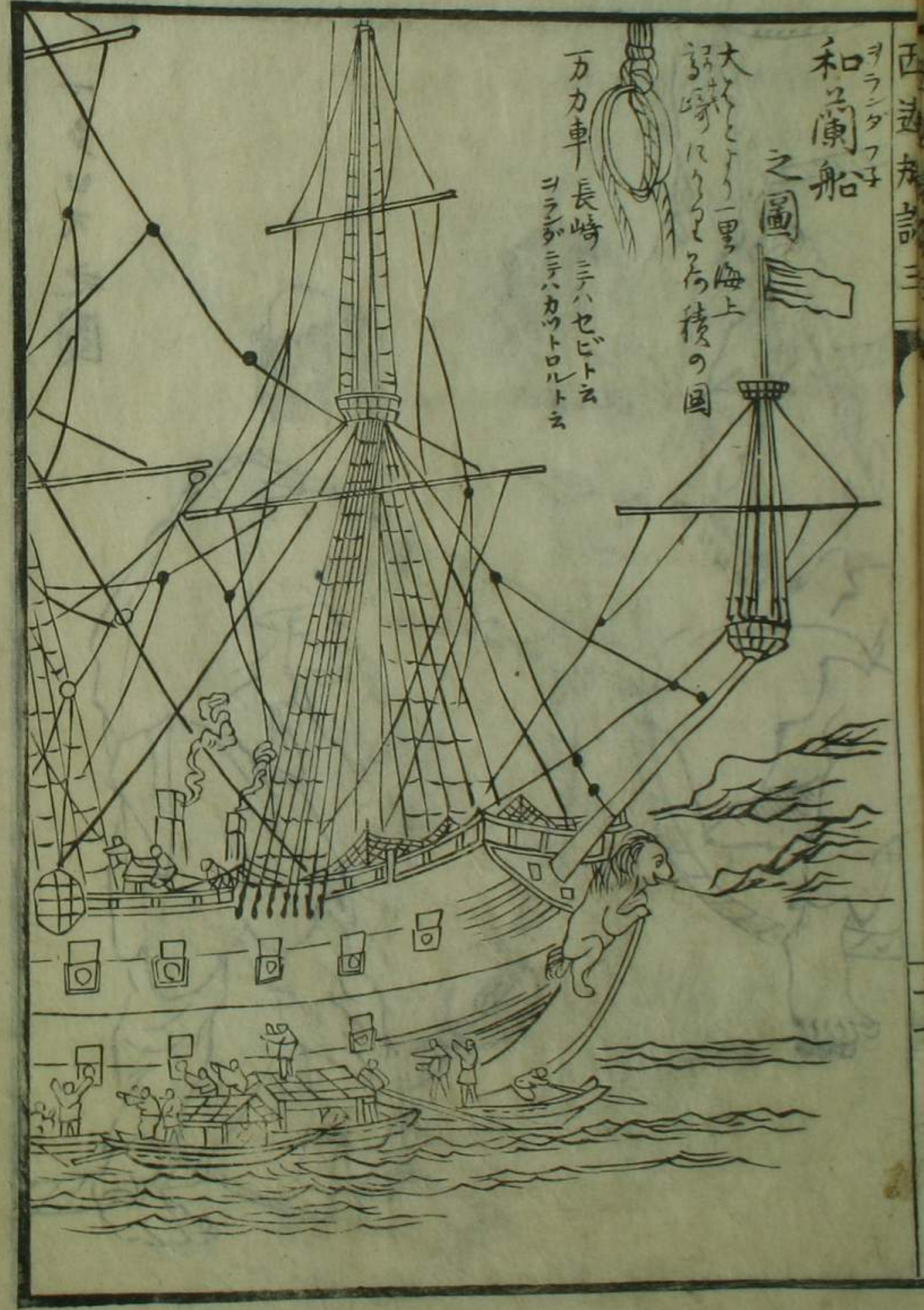
五



トタロス之圖



クロン
 真火南奴スワルトヨシゴ之圖
 夏月の躰タマハメ圖



十月十二日長崎より七里西南乃方脇津と云ふ所より戸町
深堀まで云ふ所をこぎりて山路をめぐり岩を踏みり
幸二里半余山乃頂人家あり右の方遙に五島を見
是より四十里左方天草島又島原肥後の國見て向所此國を
日本乃絶地なり脇津人家百軒余此を琉球芋を
食し風土暖地なり雪不降サボテン橙生み音草を
見たり廿八日朝五時より大波戸より舟より稲佐悟真寺
に支那人七人余と乗舟し船岸に舟を停てを鼓笛を吹
寺より送るる野長八人衣服儒子紗綾の彩色く

黒之余下人ハ鼠色木綿也大通辭清川榮左衛門下通
詞吉島左十郎支那人曰我ハ佛系にせしむる寺も
大破るなり夫ハ砂糖三俵を寄進しとて舟に
住僧ハ身持石正ハ舟にのりて通辭住僧と云ふ
此舟より舟老僧がらとて舟に船入る船
ハ程赤城費精湖周王祿程敬倫の舟より卓子
盤四人の席をこぎりて余も共舟に食し又画
描り姓名を尋る都の人と云ふ舟にのりて
キンジンと云ふなり



五島城下



五島遙見

長崎より脇津へ以路
左右海をのぞむ其右乃
方を圖海上小島多し

オカヒド
永日戸
此間皆
柴山ニシテ
二里半余
人家ナシ

西遊記



肥後

桃島

観音堂



長崎ヨリ七里
西ノ方脇津

此所ニ三崎観音アリ
長崎ノ者多ヲ参詣ス

島五

遠見

芝山三ツテ
未ナレ

昭津

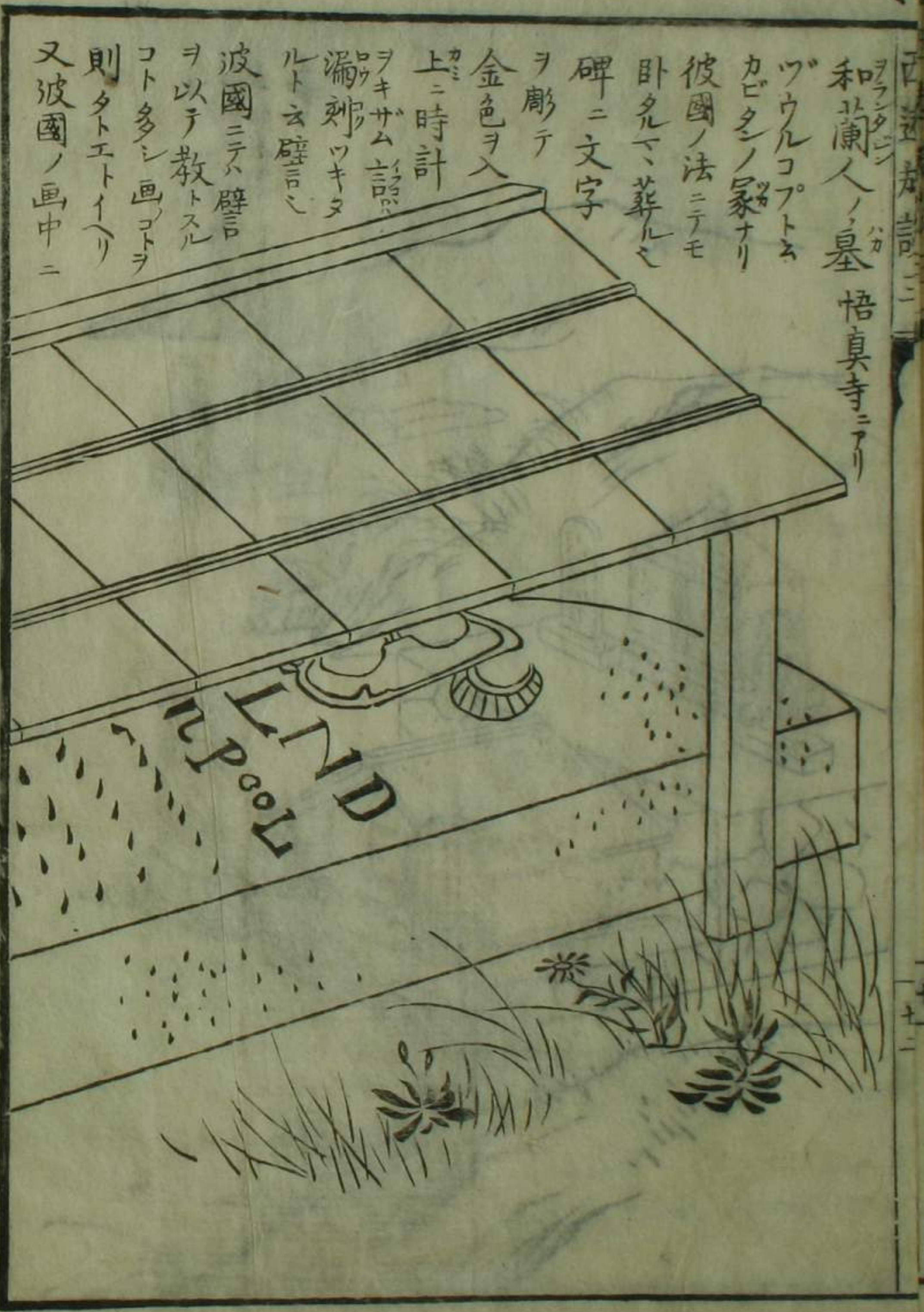


支那人ハ卧葬
トテ卧タル、ニテ
葬ル

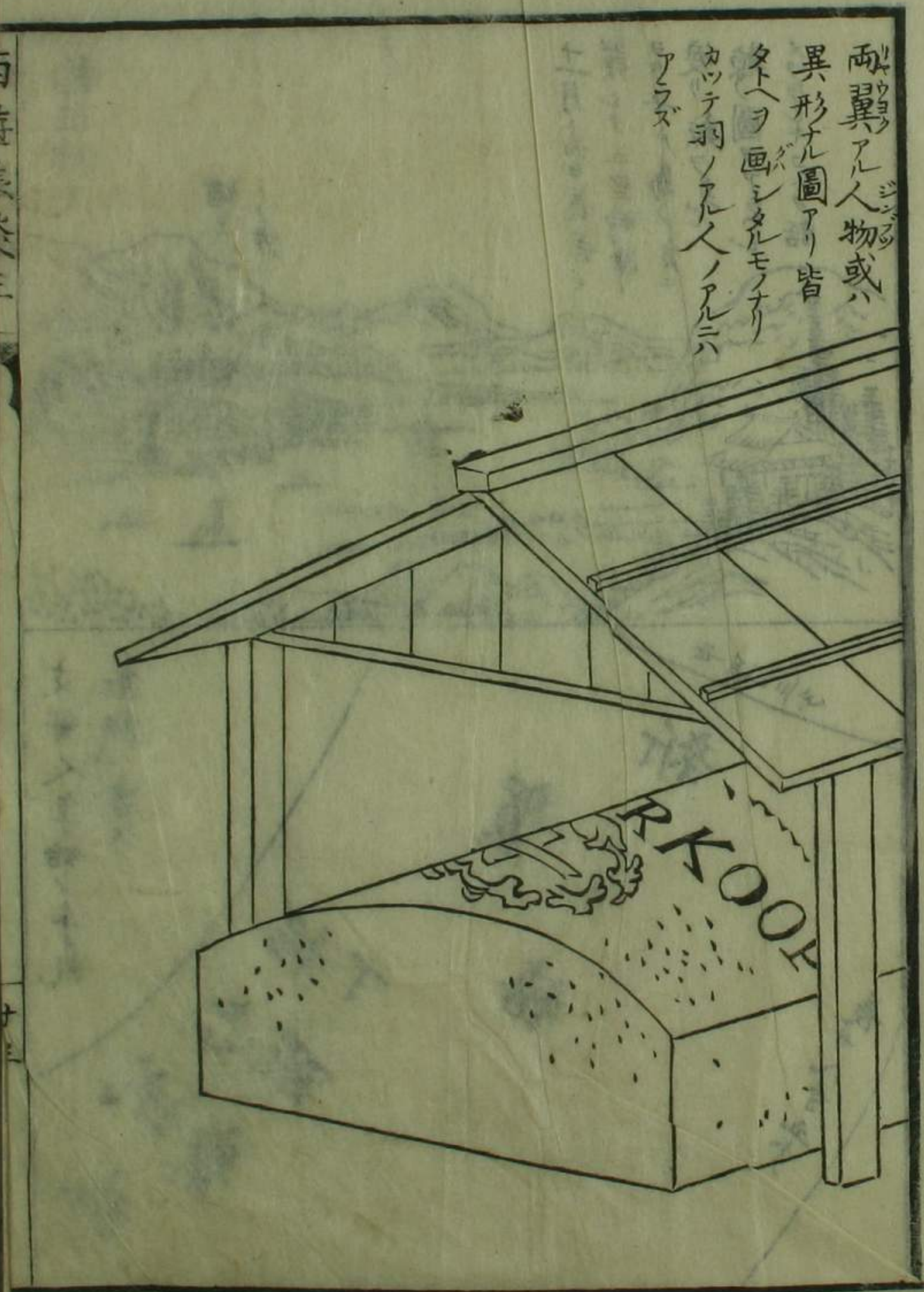
悟真寺支那人之墳墓



衣類財寶ヲ
紙ニ描入大中ニ



和蘭人ノ墓 悟真寺ニアリ
 ツウルコフトム
 カビタノ家ナリ
 彼國ノ法ニテモ
 卧名マ、葬ルニ
 碑ニ文字
 フ彫テ
 金色ヲ入
 上ニ時計
 フキサム言
 漏却ツキタ
 ルト云壁言
 波國ニテハ壁
 フ以テ教トスル
 コト多シ画コトヲ
 則タトエトイヘリ
 又波國ノ画中ニ



兩翼人人物或ハ
 異形尤圖アリ皆
 タトヲ画シタルモノナリ
 カツテ羽ノ人ノアルニ
 アズ

百世集卷之三

稻佐辨天

浦上方



十月十四日長崎ヨリ
 渡リテ三里時津ヨリ
 平戸島ノ方ニ渡リ
 鯨ヲ見ル
 鯨ノ圖ヲアヌシメツ
 ツレキコトヲ話ス

支那人年始ノ手札
 紅紙ニ書ス



山ノ上

新

嶺

丁

程

醒

赤

齋

城

恭

東ノ方

